

細胞がみられたが精子はない。50日の潜伏卵丸は収縮、硬化し精祖細胞の核が集し細胞小器官は散在、減少した。セルトリ細胞は大空泡を含み融合し小器官は散在した。変化は5才の場合と異なるが、この事は卵丸の未熟による感受性の差に原因すると推定される。

“ニホンザルにおけるコドモ間の行動”

早木 仁成(京大・理)

宮崎県幸島に生息するニホンザルの1~4才の個体について、1978年4月から12月までの約180日間、コドモ間の相互交渉に関する調査を行なった。従来、コドモ間の相互交渉は、“遊び”といわれる行動を指標として、性、年令、血縁などの違いによる量的変化の記載がなされてきた。本研究では、コドモ間の行動内容に焦点をあて、それにより性によって社会的発達の様式が異なることが明らかになった。コドモ間の行動内容と性、年令との関係について得られた結果を一部、簡単に報告する。

コドモ間の行動型の詳細な分類は省略するが、それらは概括的に、その強度と相互性により①RT(相互的で激しい行動群)②NG(一方が拒否的な行動群)③PR(近くにいるだけの最小限の行動群)④その他(マウンティング、子守りなど激しくない相互的行動群)に大別できる。これらの行動群の比率を1才と4才について分析すると、①♂-♂間では、年令の上昇にともなう行動量の減少と無関係に、RT率が高く他のものが低いという形を示した。②♂-♀間では、多少年令差はあるが、RT、NG、PRの比率がほぼ同じくらいになった。ただ、1才♀-4才♂間では、RT率が低く、NG率とPR率が高くなった。③♀-♀間では、1才♀間、1才♀-4才♀間については♂-♀間の場合とあまり変わらないが、4才♀間では、行動量も少ない上に、RT率が低くNG率が極端に高くなった。このように、発達にともなう行動量だけでなく行動内容にも変化が生じ、オスは年長になっても同性とのRT型の行動が多いのに対して、メスは、特に同年令間では回避的傾向を示すようになった。これは、オスとメスの社会的発達様式の違いを示している。さらに、行動型の詳細な分類とその相互関係などの分析、ま

た、行動の方向や個体間関係の時間的変化などについての分析を進めている。

雌日本ざるにおける高プロラクチンの性機能に及ぼす影響

田村 貴(自治医大)

大島 清(京大・霊長研)

目的 下垂体のPRL分泌は視床下部PIFによって抑制的にコントロールされ、そして下垂体はこのコントロールから解放されると能動的かつ活発にPRLを分泌することが知られている。一方最近高PRL血症の雌性性機能に対する影響(視床下部へのエストロジェンのpositive feedback能の抑制)が注目されてきた。そこで58年度研究ではこれら領域の研究の基となる高PRL血動物を作成するため、視床下部と下垂体を連絡するstalk切断の手術術式の確立を目的とした。動物は体重3~4kgの成熟雌カニクイザルを用いた。麻酔は前麻酔としてジアゼパム1.0mg、硫酸アトロピン0.1mgを筋注し、アメリカゾール(クラレー)12mg静注で挿管、酸素2ℓ/分、フローセン10%で維持した。手術はright temporal lobectomyによるapproachで行った。即ち右頭部皮膚及び骨膜を右耳介と眼窩外側縁との間でコの字型に切開し、同様の形、大きさに頭蓋骨を切除した。脳硬膜、軟膜を切開し、側頭葉に達し、吸引器で側頭葉を吸引除去しながら中頭蓋窩に到達、頭頂方向に進んでN. oculomotoriusが頭蓋底に進入する部とA. carotis internaとの間でmedialに進みここに目標とするstalkを見出した。これをマイクロ膝状剪刃で切断し、双極凝固器で凝固させ、更にこの両断端の間にsilastic plateを挿入して術后stalkの機能回復防止とした。術后より著名な多尿が見られ、これはADH(抗利尿ホルモン)の分泌不全、即ちstalkの切断が完全であったことを示す。本術式は従来アメリカで発表されているtransorbital routeに較べ手術野が広くかつ手術侵襲の少い利点があり、今後になお残された問題点(即ち1)術后点滴の維持(手術侵襲で衰弱した動物を術后マンキーチエアにつけるのはストレスが大きすぎる)、2)術中血圧モニター(フローセンにクラレーを併用すると血圧下降が生じやすい)3)術后採血(カニクイザルは小型で採血はしば